

我はいかにして 途上国学徒となりしか

塩田 光喜

● 第一一話 祖父母の結婚と国際スパイス・トレード

泰田キクは塩田定助と見合いをした時、菊の花のようにモジモジしていたが、定助はその下に、勝気でお転婆な「勝子」が潜んでいるのを見て取り、大いに気に入った。

だが、それに輪をかけて、キクの両親、慶吾とコヲは定助が気に入った。とりわけ、曾祖母コヲは一目惚れと言ってよい程の気に入らうだった。

新郎が新婦を気に入る、新婦の両親が新郎を気に入れば、婚姻は成立だ。当時はそういう時代だった。かくして、二人は祝言を挙げ、キクは詫間峠を越えて、詫間の須田の塩田家に嫁に入った。

塩田の家には定助の義母の難しい姑がいたが、キクは持ち前の明るく勝気な性格で撥ね返すことができた。

折りに触れて、新郎新婦が連れ立って仁尾の泰田に里帰りをする、新婦の父慶吾は自ら厨房に立つて、その朝、仁尾の港で獲れたばかりの選りすぐりの魚を「シツ、シツ、シツ」と言いながら、左手に持った包丁で器用に捌いていった。

こうして、「定助、これも食べよ、あれも食べよ」と実の親からも受けたことのない愛情をふんだんに注がれて、祖父定助は心の底から喜んだのだった。

新郎新婦は幸せな日々を過ごし、大正一五年にキクは長男正を、昭和二年には次男俊輔を出産する。後継を得た祖父定助はかねてから、心の内に暖めていた事業の構想の実現へと取りかかる。

それは、詫間と荘内半島の農家からの商品作物の

買い付けをやめて、朝鮮半島で唐辛子を大量に買い付け、大阪の市場で売るといふものであった。つまりは、国際的スパイス・トレードである。大いなる飛躍であった。

今日なら総合商社や専門商社が行うビジネスを、讃岐詫間の「塩田定助個人商店」が行おうというのである。

明治維新以来の日本人の海外雄飛の夢は祖父定助の内で熾んに燃え上がっていた。

祖父が国際スパイス・トレードを始めた昭和二年、日本はデフレのさなかにあった。昭和の御世はデフレとともに始まり、昭和二年（一九二七年）には金融恐慌に突入、昭和四年（一九二九年）にはウォール・ストリート発の世界大恐慌が世界を覆う。事業を始めるには最悪のタイミングである。祖父定助はこの経済的大嵐にどう立ち向かったのだろうか？

